
優しい神さま a living god

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい神さま a living god

【NZコード】

N7052A

【作者名】

桐生 拓人

【あらすじ】

死神がいるのなら生神もいるだろう そんな単純な考え方から生まれました。見た目が真っ黒黒のシロ。喋るネ「且つ使い魔のエマ。彼らの短く長い人生の話。大分前のものなので文法表現全て無視します。

good, s work · (前書き)

作者がついでに書いた別のときの恥作です。それぞれ短編で続いてあります。

g
o
d
,

s

w
o
r
k
.

ガ
シ
ヤ
ン
ツ

人通りの多い交差点で、今月に入つて三度目の事故が起きた。
事故現場はまるで待機していたかのように野次馬で溢れ、騒然と
している。

「ねえ、知つてる？ 救急車つて死んだ人間は乗つけないんだって」「へえ」

「かわりに消防車とかに乗せるらしいよ」

などといい終わらないうちに、遠くでサイレンが鳴り響いた。どうやら消防車のようだ。そのうちパトカーのやつてくるのが見えて、現場はたちまち事情聴取を受ける人間、行う人間を見ようとする人ばかりでごった返した。

「もうそろそろかな？」

「もうそろそろだよ」

一人の人間と一匹のネコが野次馬に紛れていた。
完璧に紛れて、ネコは必死になつて人間にしがみ付く。
それから一分も待たずに、ネコが少しそわそわします。
中の様子を覗いながら、ネコがきいた。

「もういい？」

ソレに人間は困つた顔をしながら、

「しようがないな」

そしてそのまま人込みを搔き分け“TAKE OUT”のテープを

潜る。

立ち入り禁止区域に立ち入る二ングエンとネコ。

だが誰も止めようとはしない。

否、誰も気づかない。

そんな事は気にならないのか、あるいはもう慣れているのか。
立ち止まつた足元には、真つ赤に染まる白いワンピース。投げ出された体。長い髪。赤い鮮血。

屈みこんで息を確かめようとしたそのとき、「何…してるの？」

後ろから声をかけられ、驚いてふり返る。
白いワンピースを着た少女が立っていた。

「なんだ、びっくりした」

ネコがつまらなそうに言つた。

少女は不安そうに辺りを見回す。

「何が起きたの？こんなに大勢…」

そのまま視線を人間の後ろに移し、ある一点でとめる。

「それは…誰？」

その、細い四肢を投げ出した人形のようなヒトは。
人間は少女を見据えて言つた。

「これはキミだよ。キミは…死んでしまつたんだ」

「つ！」

途端に少女は青ざめる。

「そんなん…だつて…私まだ…」

すっかりパニックになる少女に、人間が優しく声をかけた。

「大丈夫。生まれ変わればいつかまた巡り逢える」

「ホントに？」

優しく微笑んで言つた。

「ああ。ホントに」

「よかつた…」

ほつと胸をなでおろす。

「その機会に伝えればいい」

「…そうね」

少女は笑いながら、人間は無表情で涙を流した。

それと同時に体が透ける。もつ還るときがきたようだ。

「ありがとう」

そう言つて、少女は空になつた。

少女が空に昇るのを見届けながら、ネコが聞いた。

「あの人何だつてパニクつてたの？」

ニンゲンがポケットから紙を取り出して読み上げる。

「アヤ・ナカムラ。18歳女。“14,04分死亡。身内が黄泉側に四名。魂葬の言葉は『生まれ変われば云々』未練は…そのまま人間が固まる。

「如何したの？シロ」

「未練は『菓子の取り合いで喧嘩した彼と仲直りしてない』…

⋮⋮⋮

しばし固まる。やがて人間がポツリと呟いた。

「泣いて損した」

the inception・(前書き)

前回の続きです。

シロは人間臭くなかつた

「ねえ、如何して？」
いつだつたか、そう聞いたことがあった。
ちなみにこれは出逢つてから四回田の“いつだつたか”で、毎年
同じように訊ねていた。
するとシロもやはり、毎年同じように返すのだった。
「生きながら死んでいるからだよ」
その答えは哀しく不可解で、いつもやの答えよりシロの寂しい笑
みが気になった。

貪欲で…。

愚かで

単純で

ボクはもちろん普通のネコではないから、大抵の人間の言つ事は理解していた。

もとよりそうなるようプログラミングされている。
じゃないと主の命に従えないからだ。

ともかくボクの生きてきた中で人間とは、

けれどもその中にはキラキラしたものを持っている。

そんな存在だった。

でも、シロは違った。

単純でもなく、愚かでもなく、キラキラもしない。
ただ、まっさらな心がある。

めつたに笑わない。

めつたに怒らない。

人のために涙を流す。

そんな二ングン。

否、そんな生神だった。

the
inception.
.

do you know? (前書き)

繋がつてこぬよつで繋がつていませんが続編です。

do you know?

「INの仕事にはじどんなイニがあるの？」

HAMAは訊ねた。

するとシロは答えた。

「総てのイノチが輪廻転生できるように助けるためさ」

「総ての？」

HAMAが訊ねる。

するとまたシロが答える。

「そう。総ての」

エマは考え込む。

暫らくの静寂が訪れた。

やがて太陽が沈み月が昇る頃、エマはまた問つた。

「ボクや、シロは…？」

今度はシロが黙り込む番だった。

あれこれ考えた挙句、こう言った。

「ぼく達は罪を犯してしまったからね。その償いをしなければならない」

「うん」

「だから、その償いにイノチの手助けをする。幸福に黄泉へ逝けるように。真っ白に生まれるよう」

「それで？」

エマは間髪いれずに先を促す。

「そして100の人を幸せに出来たら、生まれ変われる」

「ふーん」

エマは、分かつたような分からぬ複雑な顔をする。シロは続けた。

「その仕事の邪魔にならぬよう、エマ達はみんな記憶を排除される」

「捨てられちゃうの？」

「そう。捨てられて…利用されるんだ…」

d o y o u k n o w , s ?

思い出とは時に想い重い鎖となる

大分たつてわかつた事だが、シロの記憶は排除されてい
なかつたらしい。

より、重い刑に処すために…

w o r l d i s w h i t e . (前書き)

前回と同じ。次回は死にねたです

w o r l d i s
w h i t e .

生神の名シロ。

使役の名エマ。

例外なほど仲のいい主従。

シロは黒かつた。
髪も黒。瞳も黒。服も黒でまつぐるぐる。
唯一白いのは名前だけだった。
そう思っていた。

シロは黒い故に、よく死神と間違われた。
道端で他の生神と出会つたび、

「キャー　　っ！…」

とか。

「うわあ　　っ！…」

など叫ばれていたつけ。

唯一白このは名前だけだけど

あの時は皮肉だなんて思つてたけど

今は分かる

シロは心が白いから“白”なのだと

他人のために泣ける生神

人のために笑く神

優しい笑顔

でも

それ故に

それだからシロは殺された

w
o
r
l
d

i
s

w
h
i
t
e

.

a
l i v i n g
a n d . (前書き)

死にネタ注意です。

一瞬何が起きたのか分からなかつた。

次の瞬間には世界が傾いていて、息が詰まった。

視界がぼやけ

世界が歪み

何がなんだか分からぬうちに、少しだけ理解した。

逆転したのはボクを抱かかえていたシロが倒れたからで

視界がぼやけていたのはボクの涙

何故
？

目の前ではシロと同じように黒い服を着た人たちが何かを読み上げている。

シロは、僕を抱えたまま胸から血を流していた。

如何
して
?

「し……る?」

呼びかけても返事をしなかった。

「シロつてば」

ようやくボクを見て笑ってくれた。

「シロは……どこへ行くの?」

血は止まらない。僕が尋ねると、口をかすかに動かした。
『い・つ・も・エ・マ・の・そ・ば・に』

シロもいつの間にか泣いていた。
動かした口からも血が滲む。

それきり動かなくなつたシロに、またきいた。

「何で、シロは泣くの？」

シロは動かないまま返事をしない。それどころか怒る」とも笑ひ事もしなかつた。

「ねえ…シロ？」

涙の伝う頬を舐めても、まだ暖かいまぶたをつむじとも、やはつシロは動かない。

いつもはくすぐつたがつて笑うのに。

「ねえ…シロ、シロ？」

シロは生神なんでしょう

シロせこれてるんでしう

お願い

お願い

田を覚まして

アヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒト

たくさんしゃべ

何
故

こんなにも優しい

他人のために涙を流す神が

何も悪いことしていないのに。

「だのに何で？」
エマは誰に問うでもなく聞く。
「如何して？」
「だがもういつもの様に答えてくれる人はいない。」

今も

これからも

a
l
i
v
i
n
g
g
o
d
.

a living wood . (後書き)

尻切れトンボですが、一応コレで完結です。何が書きたかったんだ自分……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7052a/>

優しい神さま a living god

2010年10月9日05時21分発行